



Title	クライストの『ミヒアエル・コールハース』について
Author(s)	加藤, 寛蔵
Citation	独語独文学科研究年報, 2, 55-67
Issue Date	1976-02
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25465">https://hdl.handle.net/2115/25465</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_P55-67.pdf



## クライストの『ミヒアエル・コールハース』 について

加藤 寛 蔵

### ( 1 )

クライストのノヴェレに於いては、不意の事態が突然主人公を襲い、その後の行動と運命を決定してしまうということは良く見られるところである。と同時に、登場人物に対する叙情、愛着、反省とかが極力除かれ、事件が事件を生み、迅速且客観的に息づまるような緊迫感を伴って筋が展開するものであることも等しく感じられるところである。このことは、文体的に見れば、Es traf ( zufällig ) sich, daß……; kaum / schon / nicht sobald……, als……; in dem / diesem Augenblick; dergestalt , daß…… という副文、相関接続詞が頻繁に使用され、息の長い、もつれた文章構造となって表われている。

ところで、文学作品が現にある場、そして詩人自身の自己表出がある場とは、言葉が実際に動き、生きている場所であるという考えをとるなら、まず言葉・文章構造の成否が問われてしかるべきであろう。だが、この小論では、言葉・文体と作品・詩人自身の自己表出という考察を後日に期し、『ミヒアエル・コールハース』の結末近くになって登場した《 占いのジブシー女 》の開いた局面をみようとするものである。

古い年代記に基づいて詩作されたこの作品に於いて、事件も大方片付いてしまってから登場するこの《 占いのジブシー女 》のエピソードは、予言 ( Wahrsagen )、御守 ( ein Amulet )、御札 ( ein Wunderzettel )、鉛製のカプセル ( ein bleierner Kapsel ) とか魔力的様相を絡ませて展開されている故に読む者に当惑感を与える。《 占いのジブシー女 》が登場するまでは、筋は歴史的事件に沿い、即物的・緻密に作品内在的因果を踏まえて chronologisch に進展して来たと言えるのであるが、この《 占いのジブシー女 》よっての筋の流れは、予言的、超感性的世界に超越してしまった感じを与えるからである。こういう筋の展開を Wiese は、「歴史的世界が持つ色々な現実的前提」と「超感覚的色彩を帯びる」<sup>1)</sup> ことと言っているが、いずれにしてもこのような Stilbruch に出合っている限り、次のような疑問が生じるのである。

この《 übersinnlich 》な場面は、前の《 geschichtlich 》な語りとどう関

係付けて考えたら良いのか。《geschichtlich》な世界で事件を導いて来た主人公コールハースを、いわゆる《übersinnlich》な世界から救い上げなければならないのか。それまでの語りには登場していないこの《占いのジプシー女》は、それまでの《geschichtlich》な語りとは、どのように関係し、ザクセン選帝侯を占った札をなぜザクセン選帝侯自身でなくコールハースに渡したのか。

クライストのノヴェレに於いては筋の必然的な流れから一見理解出来ないような偶然が、突然外からやって来て、場面を新たに展開し読む者に当惑感を与えることは多々見受けられる。それは例えば、人間の力を圧倒的に凌駕する自然の猛威、《地震》・《落雷》・《豪雨》・《火事》と言う、いわば可視的なものであったり、《予言》・《生霊》・《神明裁判》とか非知覚的・超感覚的な力だったりする。どうしてクライストがこの人間の力を圧倒するものを好んで表出したのか、この理由は敢えて彼の世界観と結びつけて考える必要はないだろう。前者、自然の猛威について言えば、それは突然我々人間を襲うものであるという理由からして非日常的なものであるが、現実的感覚から言えば、最も鮮明な現実と言って良いだろう。それは、いつかは知れぬが必ず我々を襲う確実な現実であり、それが筋の中に挿入せられることによって、現実感と緊迫感が生れて来るものであると思われる。『ミヒャエル・コールハース』について言えば、登場人物が内面で葛藤しているその時、その内面的世界をこのような鮮明な外的現実素早く還元することによって、あたかも葛藤の世界がなかったかのように筋が客観的に進展して行くのである。

ところで、この作品に於ける、《予言》・《御守》・《ジプシー女》と言う魔術の様相のもとに展開している局面は、どう考えたら良いだろうか。このエピソードは、後にみるように、コールハースがザクセン選帝侯に、首に懸けている《鉛製のカプセル》の由来を尋ねられたところから始まるのだが、その時、「このカプセルには、妙な事情がありましてね、大体七月にもなろうか、私の妻の葬式の丁度次ぎの日に・・・」(82)という回想が始まることから考えて、この前の語りとは密接に関係していることが示されている。この《übersinnlich》なエピソードは、一見偶然に挿入された感があるのだが、それは、コールハースが妻の死後行った『復讐の事件』の時より始まっていて伏線としてはりめぐらされていたのである。もしこのエピソードを、Stilbruchと考えるなら、まずその語りの時間的継続から言って、我々は唯事件が事件だけを生んできたchronologischな時間に従い、つまりその筋の緊迫感を伴った流れにだけ従い日常的時間を感じないで、この《回想》場面に至ったのでなからうか。詳しく後に見るように、このエピソードは、コールハースとザクセン侯のカットバックの方法を取った語りで、過去が回想

され、《鉛製のカプセル》に潜められている《御札》が二人の生き方を規定して行くのだが、これは内容的には、それまでの語りが全部そこに収斂されていると言って良いだろう。魔術の様相を呈している、《御札》・《御守》・《ジブシー女》も結局は、前の語りの内容の象徴として凝縮されて、前の語りの内容を受け継ぎつ、展開されていると言えるだろう。<sup>3)</sup> Wieseが言う《超感覚的な色彩を帯びる》このエピソードは、前の内容が交錯されて始めて理解されなければならないような気がする。この点、Wieseは《übersinnlich》な局面の展開に重点を置き前の語りと余り関係付けていないように思われる。例えば、このことはコールハースの行動の意味付けに次のように表われて来る。「コールハースも実際、神の手から手綱を取ることが出来なかったし、許されなかったのだ。それにも拘らず、彼はそれを試み自分流に正義を押しつけようとしたことは、彼の罪であったし悲劇的傲慢であった。」<sup>4)</sup> 確かに作品の結末としては、コールハースは《自分流に》社会に正義を押しつけようとしたことによって刑を受け、その意味では悲劇であったと言えよう。コールハースのこの悲劇は、後に見るように自分の意識の中で正義を外的世界と無関係に組み立ててしまい、それを至上命令として pathologisch に行動に移してしまうその側面に求められるのだが、だからと言って彼が神の手から手綱を取ることが《許されなかった》と解釈しては、《geschichtlich》な局面での語りが生きてこないように思われる。勿論コールハースは、神と手綱の取り合いをしていたのでもないし、彼が《復讐の仕事》と言う形で自己の主張を押し通そうとするまでも、又それ以後も神不在の無秩序な世界があったのだということも合せて考えなければならないだろう。なぜ彼が《自己流に》正義を押しつけようとしたのかが問われてコールハースの行動も意味を持って来るのである。

ところで、この作品を理解する上で、いわゆる主人公コールハースの pathologisch な行動は如何なる意味を持っているものとして考えたら良いだろうか。彼の行動は「一種の狂気」(41)と語り手自身も言っているが、この《狂気》は作品の結末から考えて単に理性的な行為でないという意味ではないのである。この作品では、コールハースのバトスは、人間的一体感のある豊かな生を展望させるものとしてあるように思われる。つまり、一体感を失えばばらばらになっている生が、このコールハースのバトスを刺激として回復し、より高い豊かな生を開いて来るのである。このようにコールハースのバトスを考えると、一体感の無い、疎外を生み出す生を創り上げたザクセン侯に対してこの作品では断罪を用意しなければならないだろう。このような内容を持って展開されたのが、《占いのジブシー女》による《übersinnlich》な場面なのである。そしてそれは、具体的には《鉛製のカプセル》に潜められている《占い札》を媒介としてコールハースとザクセン侯の話として展開している。それでは一体、なぜコールハースが《自己流に》正義

を押し通そうとした行為に出たのだろうか。

( 2 )

この作品の導き手コールハースは、その冒頭に於いて次の様に紹介される。「ミヒャエル・コールハースと言う名の馬商人が、十六世紀の中頃、ハーフェル河のほとりに住んでいた。彼は教師の息子で、当時最も誠実な、しかも同時に最も恐しい人間の一人 = einer der rechtschaffensten zugleich und entsetzlichsten Menschen seiner Zeit であった。この並外れた男は、三十才になるまで、善良な市民の鑑 = das Muster eines guten Staatsbürgers として通っていたと言うことである。……しかも正義感が彼を盗賊と殺人者 = Räuber und Mörder にしたのだ。」(9) << der rechtschaffenste Mensch >> << das Muster eines guten Staatsbürgers >> がどうして同時に << Räuber, Mörder >> であり得るのか、我々は日常的感觉では理解出来ない非日常の世界にその冒頭に於いて巻き込まれてしまう。クライストは、まず読者の日常感觉到衝撃を与えそして止まることを知らぬ文体で読者を作品世界に誘い込んでしまうのだが、この場合に問われているのは、人間とはそもそも何なのかと言う哲学的問題ではないだろう。まずクライストが読者に迫るのは、<< das Muster eines guten Staatsbürgers >> が << Räuber, Mörder >> に至る過程であり、何がそうさせ、何がコールハースに問題となり、そうなったかの原因追求なのである。クライストにとって << das Muster eines guten Staatsbürgers >> と言えども << Räuber, Mörder >> に成るのだという人間存在がかかえているその不可思議に読者を立ち止まらせることが眼目ではなく、そこに至る外的原因追求であり、それが即物的に迅速に進展する作品の世界としてある。それは、主人公、馬商人コールハースが、馬数頭を連れてザクセン領のトロンカ城下を通ろうとした時、今までついぞなかったのに今回は通行止め << 遮断機 >> が下されていると言う突然の単純な出来事から始まり、入り組んだ事件に発展し、ザクセン領の無秩序な腐敗した社会が浮き彫りにされて来る仕組みになっている。

先ず最初にコールハースは、<< das Muster eines guten Staatsbürgers >> として描き出される。コールハースは、トロンカ城下を通る際に通行証を求められたのであるが、これは最近通行税を取る << お触れ >> が出たと言うのが、ユンカー・フォン・トロンカの理由であった。コールハースは仕方無く今回は担保として馬二頭とそれに馬番を残してトロンカ城下を無

事通過させてもらう。だが、ドレーズデンの秘書局で、＜お触れ＞の件を聞いてみるとそれが嘘で、ユンカー・トロンカの恣意的法の行使であることが解る。それでコールハースは、通行証の＜お触れ＞の件が事実無根である証明証を持ってトロンカ城に行ってみると馬番は＜無礼な振る舞い＞をしたとかで、したたか殴られ追い出されたという事であった。しかも、担保として置いた馬と言えば、「彼の毛並みのつやつやした、良く肥えている二頭の馬ではなく、痩せこけ疲れ切った一对の駕馬」<sup>18)</sup>だったのである。馬は丁度刈り入れ時だったので畑仕事に使ったと言うことであった。馬商人コールハースにとって、たとえ商品である馬がユンカー・トロンカにこの様な形で酷使されたとしてもまだ＜das Muster eines guten Staatsbürgers＞として耐え得るものであった。彼は、こうなったのも馬番として残した下僕に非があったのではないかと調べてみる余裕と冷静さがあったのである。「・・・彼の試金秤= Goldwaageにも似た正義感はまだ揺れ動いていた」<sup>(14)</sup>のである。だが、下僕に聞いてみると＜無礼な振る舞い＞は全くの嘘で、下僕が馬が畑仕事で酷使されるのに見かねて、馬を洗ってやろうと連れ出したところ、それを差し止められた上にさんざん殴られ、追い帰されたと言うことであった。

ここでコールハースは、法の立場に立ってユンカー・フォン・トロンカが自分と下僕に対して加えた不法行為を罰し、その損害を補償し、馬を原状にもどす訴訟を起す。この訴訟の過程で明らかになって来るのは、トロンカー族の法を無視した横暴である。ユンカー・フォン・トロンカ一族であるヒンツ・フォン・トロンカは献酌侍臣であり、クンツ・フォン・トロンカは財務官であり、彼ら二人がこの訴訟に介入しコールハースに法廷で裁判をうける権利を与えない。終には、内閣からは「コールハースは、ドレーズデン法廷の報告によると、行儀の悪い訴訟狂 ein unnützer Querulantである。・・・城に人を送り馬を連れて行くか、少なくともユンカーに、馬をどこへ届けたら良いかその届け先を知らせるように・・・」<sup>(24)</sup>という裁決書が出る始末である。そしてこの訴訟の過程でコールハースは妻を失うことになる。つまり、自国領主ブランデンブルク選帝侯に取り入ってもらおうと、直接嘆願書を持って行った妻が致命傷を負われ追い帰されたのである。その後、間もなく妻は死ぬ、作品の中では、誰によって妻が暴力を加えられたか言っていないが、選帝侯の側近であるトロンカー族カルンハイム伯の仕業であることははっきりとしている。ルター派に帰依しておった妻リースベトは、「汝の敵を許し、汝を憎む者にも善をなせ」と言う Feindesliebe の一節を指差しながら息を引き取るのであるが、この妻の埋葬を終えて後「・・・彼は、彼女の荒涼としたベットの前にもう一度平伏して、それから復讐の仕事 das Geschäft der Rache に取りかかった。」<sup>(31)</sup>のである。さて、これからコールハースは、ユンカー・フォン・トロンカを捕えようとトロンカ城・ヴィッテンブルグ・ライブチヒと暴

行の限りを尽す。

今まで馬商人コールハースが蒙ったトロンカー族の法を無視した横暴を「*das Muster eines guten Staatsbürgers*」としてのコールハースが何故に耐え得る事が出来ず「*das Geschäft der Rache*」という直接行為に出たのが問題となって来る。コールハースは妻の言った *Feindesliebe* を良き夫、父として受け入れるべきではなかったろうか。敵を敵さなければ生活自体が破滅してしまうことを身をもって知らされた臨終の妻の、いわばこの生活者の論理を受け入れるのが「*das Muster eines guten Staatsbürgers*」としてのコールハースでなかったろうか。「試金秤にも似た正義感」「世のもろい仕組をわきまえている公正な感情」(15f)の持ち主としてのコールハースは、内閣の裁決通りに馬二頭をトロンカ城に取りに行くべきでなかったか。たとえ「無礼な訴訟狂」と言われても、そうするのが馬商人としての知恵でなかったろうか。だが、もうこの時には、馬商人にとって馬二頭が問題となっていなかったのである。コールハースはこの時以後堅実に家業を営んできたその場から離れて何が正義であるかを問い始めているのである。もう彼にとり馬は問題ではなくなっていたのだし、「・・・たとえ犬二匹であったとしても同じような痛恨を持った」(24)のである。馬商人にとって今問題になっているのは、まず「人間としての権利」であった。このことは、「こんなことをするのは、人間的と言えるだろうか」(14)とか「・・・足で踏みつけられる様だったら、人間よりもむしろ犬であった方が良い。」(27)と言う言葉に表われている。又コールハースにとって「人間としての権利」が守ってもらえない者は、社会から除け者にされたことを意味し、その点から彼は自分の暴力行為を正当視しているのである。このことは、コールハースの「復讐の仕事」に見かねて、宗教的、社会的地位を背景として調停に入ったルターとの会話に見られる。「私が人間社会とやっている戦争は、暴力行為 = *eine Missetat* である。それもあなたが私に保障して下さる様に、私が社会から除け者とされていないという話のことですが。・・・法の守護を拒まれた者を除け者と私は言います・・・」(45) いずれにしてもトロンカー族がコールハースに与えた横暴は、彼にとって人間性の否定、社会からの追放を意味しており、彼が馬を取りに行かなかった理由となっている。更に彼個人に関わるこの様な問題の他に、コールハースの「公益に対する責任感」<sup>5)</sup>をも合わせて挙げられるだろう。トロンカ城下で受けた横暴は、コールハース個人だけではなくたのであり、この人々の為にも彼は「復讐の仕事」をしなければならぬ「人並み優れた感情」(16)を持っていたのである。この社会的正義感が、自分自身でユンカー・トロンカを制裁しようと言う盲目的衝動に変わりザクセン領内で「*Missetat*」を拡大させて行く結果となる。ところで、コールハースがこの社会で犯した罪を、後にこの社会で償わなければなら

ないのだが、それと言うのも実は社会に対する人並み優れたこの責任感にその原因があるのである。この社会的責任感が反社会的行動となるというコールハース的矛盾は、その憧憬的心情と、すぐにその憧憬を熱狂的に行動に移してしまうロマン的性格に原因が求められよう。コールハースに於ける現実の社会とは、彼によって願望され憧憬された社会に過ぎないと言って良いだろう。この願望によって捉えられている社会がそのまま主観の内に止っている限りコールハースには悲劇は生じなかったろうが、一度ユンカー・トロンカの様な横暴に出会うと主観の意識の中でその矛盾が自己増殖し、いわば現実との関わりを失った形で対社会的行為となって現われてしまう。その結果、コールハースの行為は、他者の内に自己を見い出す事が出来ず孤立無援となって行くのである。だがコールハースは孤立無援に止ることが出来ない。従って自己の願望、憧憬を他に理解させようとするのだが、それは pathologisch に自己の存在を他者に押しつけようとして現在化してしまうのである。これは、「帝国からも、世界からも自由で、神にのみ従っている者」(36) と言う妄想的な自己規定となり、「・・・我々の臨時政府の座、ルツェンの本城で」(41) と言う <Schwärmerei> として表われるのである。そしてそういう行為には破滅が待っておりその破滅の中で自己の正当性が増々熱狂的に主張されてゆく。

ところで、クライストはこのコールハースのような盲目的に熱狂に走るロマン的性格の人物を如何に描こうとも、彼は現実の内より出た人間として描き出すことを忘れてはいない。ここには、微妙な Realismus と Romantik の交錯が認められよう。例えば、コールハースが蒙った法無視の横暴は単に彼個人に関わるものでなく、その様な無秩序と腐敗はザクセン領内の現実の一こま一こまに至るまで蔓延しているように描き出すのである。それは、広場の場面の客観的文体による民衆の姿として描写されている。

ようやくザクセン選帝侯の裁可によって、ドレーズデン法廷で馬二頭に関する裁判が行なわれることになる。それでコールハースがトロンカ城に乗り込んで以来全く行方不明となっている当の馬が探し出されなければならなくなった。この任には皮肉にもユンカーの従兄弟、財務官クンツ・トロンカが当り、この閣下の御尽力によってようやく馬二頭が探し出される。だが、こともあろうにザクセン領内全体を震撼させたこの二頭の馬を引き連れて広場に現われたのは、「皮剥人 Abdecker」だったのである。今までコールハースは、<人間としての権利>・<社会に対する責任感> から正義の戦いをを行っているのだと称して来たが、そもそもの発端と言えばこの馬二頭であった。その馬が今 <Abdecker> に引っぱられ瘦せ衰えた姿で、よたよたと裁判の重要な証拠として広場に現われたのである。広場には、群衆が「・・・とめどもなく高笑いをし、そのために国家が動揺したその馬が皮剥人の手に落ちたぞと口々に叫びながら」(58) 集まって来る。

広場はみるみるうちに人の山である。例の馬が来たぞ、それも皮剥人に引っ張られてと哄笑しながら広場に集って来るこの民衆の底ぬけに健康な素朴さが、今度は健全な憤りとなって、皮剥人の手に落ちた見る影もない二頭の馬を自分の部下に連れ出せと威張り散らすクンツ・トロンカに突然襲いかかる場面は、その行き場なく押し込められていた民衆の憤り故にザクセン領の権力的政治の蔓延を示している。この腐敗した執政をWieseの様に「今や、正義、不正が一体どこにあるのか、もうほとんど決定されなくなった」<sup>7)</sup>と理解しても良いだろう。クライストは、コールハースの行動が非現実的、観念的なものであろうとも、この民衆の姿を描くことによって、その行為が現実の中から生れたものであることを示そうとしている。そして行き場なく押し込められている民衆の中心にいるのが皮剥人である。彼は健康な民衆の憤りの真実に比べて、異様な最下層民の孤立した真実を持って *realistisch* に描かれている。クライストに描かれたこの皮剥人には、民衆にすら蔑まれてただ忍従だけを強いられた人間の持つ絶対孤立の凄みがある。彼は凡てに無関係にただ自分の仕事をしているだけで、そこでは人間的感傷は全く押し殺されてしまっている。クライストはこの様子を最下層民の象徴として皮剥人に「*ein bleierner Kamm*」(61)を与えているのであるが、この作品では <鉛製 *bleiern*> は、忍従を強いられた者の象徴として、後の < *eine bleierne Kapsel* > に受け継がれて行く。つまり、今民衆の健康な憤りは権威を笠にきた横暴者クンツ・トロンカに襲いかかったが、この皮剥人の怨念は行き場なく止っていて、<鉛製のカプセル>に潜められてザクセン侯を悩ますのである。

今まで述べて来た様にコールハースの対社会的行動は、前もって願望として自己の意識の中に先取されている、いわば意識内現実を再確認すると言う傾向を持っていた。そして、この様な行動は現実の中に自己を定着させる基盤を見出すことが出来なくなり孤立状態に立たされるのが常であるのだが、そうなると自己の正当性の主張がバトスとなって破滅に至るものでもあった。クライストはコールハースの行動はこの様に盲目的に、熱狂に駆られたものであったとしてもそれを現実の内から生まれたものである装いはしてあったのである。それは、< *das Muster eines guten Staatsbürgers* > としてのコールハースが蒙った横暴は、これ以上耐え得ることの出来ないものとして、ザクセン領内の無秩序な執政の姿をコールハースの前に横たえている。この無秩序な世界の責任はザクセン選帝侯に帰せられなければならない。ザクセン侯もコールハースと同様に不自然な盲目の人物である。彼は自分の確固とした意志から執政を行うことはない。盲目的・無意志なザクセン侯は、コールハースに <大赦>を与えたかと思うとそれを破棄してしまう法の恣意的執行者としてある。この「卑劣で王侯らしからぬ行為」(86)は、愛情問題までにはびこり、ザクセン侯は自分の臣下である財務官クンツの妻を恋人にしている見返りとして

クンツの権力行使を許しているのである。この奇妙な三角関係は、コールハースがベルリンで死刑の裁判を受けるべく護送されている時に読者に知らされる。丁度その時、ザクセンの宮廷の人々が鹿狩りをしていて、護送中のコールハースがそこを通り、ここでザクセン侯と会う事になる。

### ( 3 )

さて、クライストは、結末部分で自分の観念を現実化しようとして法を犯してしまったコールハースと、盲目的執政から腐敗と無秩序の世界を創り上げてしまったザクセン侯を合わせ、裁きと赦しの場面を展開する。より高い場から許しが認められなければならないのは、「余りにも性急な試みによって」(100) 世間に自分の権利を押し通そうとして法を犯し処刑されるコールハースであり、裁かれなければならないのは、そもそもの無秩序の張本人ザクセン侯である。コールハースは、如何に彼の行為が < 人間としての権利 > ・ < 社会に対する責任感 > という一般的内容を持った動機から発したとしても、法を犯して主張されている限り法の裁きを受けなければならない。それは彼の悲劇としてあるのだが、しかしそこに先取されている真実も又あるのである。だがそれは、クライストにとって、象徴的にしか救い出すことの出来ないものである。つまり、コールハースの行為は、社会的にも倫理的にも行き場なく閉塞している現実に関わっているのであるから、その解決は *chronologisch* な世界で求められなければならないのだが、クライストは、これを極めて象徴的に、暗示的に昇華している。

この話は、コールハースが絹の紐で首にさげている「小さな鉛製のカプセル = *eine kleine bleierne Kapsel*」(82) がザクセン侯の眼に止まり、その謂をコールハースが尋ねられたことから始まり、二人によるカットバック (*Rückblende*) の方法で次々にこの < カプセル > に秘められている過去の秘密が明らかにされていくと同時に、現在の二人を規定して行く。まず、コールハースが「封ロウで封印してある小さな紙」(82) をカプセルから取り出してその由来を語る。これをコールハースは、ザクセン領で直接行動を取っている時に、ユーターボックと言う町で人々に囲まれ占いをやっているジブシー女から手に入れたということが明らかになる。彼女は人垣を分けてコールハースの所に来、「その旦那さん、占いが知りたいならこのあたいに訊いたらいいよ」(83) と言ってこのカプセルを渡し「お守り (*ein Amulett*) だ、馬商人のコールハースさんよ、しっかりしまって置きな、いつかお前さんの命を救うだろう」(83) と言って消えてしまったと言う事である。さてこの話を聞いてザクセン選帝侯は気を失い倒れてしまう。ザクセン選帝侯がこの話を聞いて人事不正に陥ったのは、実はこの < 御礼 > に選帝侯の家運についての

占いが印されているからである。コールハースがジブシー女の占いを見ていたその時、選帝侯がこの女に家運を占ってもらっていたのである。ジブシー女は選帝侯に「それでは貴方に三通り、貴家の最後の君主、その君主が自分の領国を失う年代、そして武力によって領国を奪う人の名前を書いて上げます」(92)と言って民衆の前で書きその上に「中指にはめていた印章付きの鉛製の指環」(92)が押し当てられた< Zettel >が、コールハースの持っていたのと同じものだったわけである。ジブシー女は、この占い礼を選帝侯自身に渡さずに「それが欲しいなら、民衆の後ろ、教会の入口のベンチに立っている羽根飾りの帽子をかぶっているその男から買い取るんだね」(92)と言って人ごみの中に消えてしまったと言うことである。民衆の後ろ、教会の入口のベンチに立っている男がコールハースであることが今ザクセン侯に解ったのである。

今までコールハースは、ジブシー女に渡された< Amulett >の内容を知らず、又知ろうともせず首に下げ< das Geschäft der Rache >をザクセン領内で繰り抜けて来てしまった。彼がザクセン侯の家運、ザクセン侯自身の生命に関わるこの< Amulett >の内容を知っていたならば、彼は人間として認められる場を与えられていたかも知れぬ。あるいはザクセン侯としても< Zettel >をコールハースから受け取っていたら、その予言を警告として、彼の執政もやり場のない腐敗から免れていたかも知れぬ。だが、コールハースは敬虔なルター主義者で、< Amulett >・< Wahrsagen >を信じる神秘主義者ではなかったのである。二人は、この< 鉛製のカプセル >に潜められている< 不思議な占い礼 >の眼に見えない糸で操られて不自然な、無秩序な世界を創り上げてここに至ってしまったのである。

ところで、このエピソードの中で予言に呪縛されているのはザクセン侯だけである。予言が未来の不可視な力として現在を規定し得るには、まずこの現実についてかくありたいという強い未来希望を生み出す状況がなければならないだろう。この現実が逃れられない程に不信と無秩序に満ちている時、一方にはかくありたいという願いが強く表われ、その願いに仮託された予言が異様な呪縛力を持って来る。ザクセン侯は今この様な状態に置かれている。彼の惹き起こした不信と無秩序はザクセン領内は勿論のこと自分の側近にまで浸透し、愛情問題までにそれは表われている。やり場のないこの閉塞状態の中で、家運に関わる< 不思議な占い礼 >が力を持って来るのも当然と言えばよい。いわば極限的状况から直接行動を取っているコールハースにとって、< 占いのジブシー女 >は異様なものとして感じられてはいないが、ザクセン侯にとっては、彼女はまさに魔力を持っている老婆なのである。それは、「不気味に手を差し出して」(92)とか「大理石で出来た眼からの様に、冷たく、生気なく腰かけを見すえて」(92)とかジブシー女を表現していることから窺える。このようなザクセン侯にだけ絶対的拘束力のあるこの< 不思議な占い礼 >が、今コールハース

スの掌中に入ったことにより、二人は今までと違った立場に立ち、コールハースとしても、ザクセン侯の存在を左右し得るようになる。この主従の転倒は、コールハースの赦しであり、**< das Muster eines guten Staatsbürgers >** の意味付けであるのだ。

ザクセン侯は、自分の家運、ひいては生命を占った **< Zettel >** を得ようと又もや盲目的行動を展開する。彼は、**< 大赦 >** を破棄したのに又もやこの **< Zettel >** と交換にコールハースの「生命と自由」を保障すると言う恣意的行動を行うのである。ここで、**< お守りだ、大事にとっておくことだ、いつかは生命を救うだろう >** と言った占いのジブシー女の予言がコールハースにも当たるかも知れなくなり、筋に緊張感が生れて来るが、コールハースは、「下劣で王侯とも思えない態度が忘れられない」<sup>(86)</sup> と言って生命との交換を拒否する。この場合、ザクセン侯とコールハースは二人共生命を賭して対峙しているのだが、コールハースは自らの生を捨てて義に生きようとする。クライストは、コールハースの子孫が代々栄えていることを示し作品を閉じているが、だからと言って個の生を子孫の繁栄と代替するには、余りにも苦渋に満ちた自己主張としてあるだろう。ここでクライストが敢えて個の死を歴史的視座から救い上げていることによって、**< das Muster eines guten Staatsbürgers >** の意味も具体的な拮据りを得て来る様に思われる。

コールハースは **< Zettel >** を交換しない事によって、単に個人としてザクセン侯に復讐を行っているのではないだろう。たとえ彼の行動は、願望と憧憬によって先取された意識内現実を再認するため押しつけようとしたものであったとしても、それは現実の投影を全く失っているものではなかった。意識というものが現実の何かについての意識である限り、その何かも問われてしかるべきであろうし、その何かを背負っていたのが、**< das Muster eines guten Staatsbürgers >** であったと解釈して良いだろう。このことは、こともあろうに **< 占い札 >** を当のザクセン侯にではなくコールハースに渡した **< ジブシー女 >** とはどんな素性の女であり、何を象徴していたのかと云う解釈につながって来る様に思われる。

まず、「腰掛に坐りながら、彼女を取り囲んでいる人々に唇で占いをしているジブシー女」、「我々を取り囲んでいる人込の中へ」消えたジブシー女と言う表現から、このジブシー女は民衆の中心に居てその場からの使者と解釈して良いだろう。つまり、ジブシー女からもらった **< 鉛製のカプセル >** を絹糸で首に下げ **< das Geschäft der Rache >** を繰り上げてコールハースは、民衆の場、つまり人間の一体感の失なわれた生の場からザクセン侯に復讐をして来たのであり、それはこのいわゆるこの **< übersinnlich >** な場面に於いて継承されていると解して良いだろう。そしてこのカプセルが **< bleiern >** で、このジブシー女が中指にはめている

指環が << bleiern >> であると言う表現は、<< ein bleierner Kamm >> を持って民衆の中心にいたあの皮剥人と同種の間人であると解して良いだろう。つまり、この << bleiern >> は亀裂した暗い現実の生を象徴していると同時に、ザクセン侯に対して、失なわれてしまった生の立場からの復讐心を潜ませていると言って良いだろう。<sup>7)</sup> この世で犯した科で死に直面しているコールハースが挑んでいる復讐は、上に述べたことを背景としてあるのであり、それ故に彼個人としては断罪されるが、より高い歴史の場からの救いを暗示しているように思われる。

ところで、このジブシー女はコールハースの死んだ妻の Doppelgänger なのである。「馬商人は、彼女と彼のなくなった妻リースベトが妙に似ているのに気がついた・・・」のである。このジブシー女は、妻の頸筋についていた黒子も持っていたのである。今コールハースは、冥土の復讐の女神と共にザクセン侯に復讐を行っていると解して良いのだが、それだけでは一面的解釈に流れてしまう様に思われる。先ずここで、妻の死はいわば調和的生がザクセン侯によって破壊されたことを象徴していることも合わせて考えてみなければならぬだろう。彼女は「貞節な女性」(16) であり、如何なることから子供と家庭を守る「勇気と賢さ」(29) を持った女性であった。彼女が死の床で示したあの Feindesliebe も単なる彼女の寛容の精神の表われではなく、敵を赦さなければ調和的生が崩れてしまうことをその場から知っていた者の言葉だったのである。つまりこの『ミヒャエル・コールハース』の異様な非日常的世界にあって、彼女だけが日常的生を象徴しており、彼女の死はその終焉を暗示していたのである。そして今ジブシー女という Doppelgänger によって、その失われた生が希求されていると同時に、その面からの裁可もなされているのである。クライストは、この Doppelgänger を描くに当って geisterhaft の性質を極力避け realistisch な装いをこらしている。生前、コールハースと幸福な生を営んでいた時の犬であろうか、この犬が Doppelgänger に尾を振りながらまつわり付いている。そして今、夫が << 余りにも性急な試み >> 故に法を犯し刑を受けるその直前のひと時、子供達にリンゴを与え、抱擁している。これは、コールハースにとっては最後の妻と子供達のひと時である。この作品では、このような人間的一体感のある生が求められていたのである。だが、ひとたび失なわれてしまった調和的生は、それが回復するためには、コールハース的パトスがその刺激とならなければならぬと言うことをクライストは考えていたのだろうか。

#### 原 典

Heinrich von Kleist, *Sämtliche Werke und Briefe*, 2 Bde, hrsg. von Helmut Sembdner, Hanser Verlag, München, 1965.

本文中、引用後の( )内の数字は原典の頁数を示す。

#### 参考文献

- Von Wiese, B.: Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka, Düsseldorf, 1956.
- Gundolf, F.: Heinrich von Kleist, Berlin, 1922.
- Reske, H.: Traum und Wirklichkeit im Werk Heinrich von Kleists, Stuttgart, 1969.
- Herrmann, H.-P. Zufall und Ich. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift 11 (196).
- Müller, R.M.: Kleists „Michael Kohlhaas“. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 44. (1970). I. Heft.
- Best, O.F.: Schuld und Vergebung zur Rolle von Wahrsagerin und „Amulett“ in Kleists „Michael Kohlhaas“. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift, 20. (1970).
- 浜中英田: クライスト研究, 筑摩書房, 東京, 1971.

#### 注

- 1) Von Wiese, B.: ibid. S.59.
- 2) クライストのノヴェル全体の偶然について、Herrmann の前掲論文 Zufall und Ich 参照。又、『ミヒャエル・コールハース』に於ける <落雷>・<豪雨>・<洪水> は、今述べた様に単純に片付けられないものであることも付記しておく。
- 3) Best は、前掲論文の中で、内的連続性の観点を持ちつつ、いわゆる <übersinnlich> を世界を罪と赦しの点から考察を行ってゐる。だがその前の語りの内容が余り問われていないように思われる。
- 4) Von Wiese, B.: ibid. S.60.
- 5) Müller, R.M.: ibid. S.105.
- 6) Von Wiese, B.: ibid. S.56.
- 7) Müller, R.M.: ibid. S.119.